

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究(小・中学校)」
平成24年度委託事業完了報告書

【推進校】

| | | | |
|------|-----|----|----|
| 道府県名 | 山口県 | 番号 | 18 |
|------|-----|----|----|

| | | | |
|------|--------------|------|-----------|
| 推進校名 | 山口県周南市立周陽小学校 | 研究主題 | I、II、III型 |
|------|--------------|------|-----------|

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題への取組状況

○重点課題

- ・児童が表現したくなるような単元を貫く言語活動の充実
- ・児童の思考を促す発問、板書、ノート指導の工夫

(1) 研究のはじめに

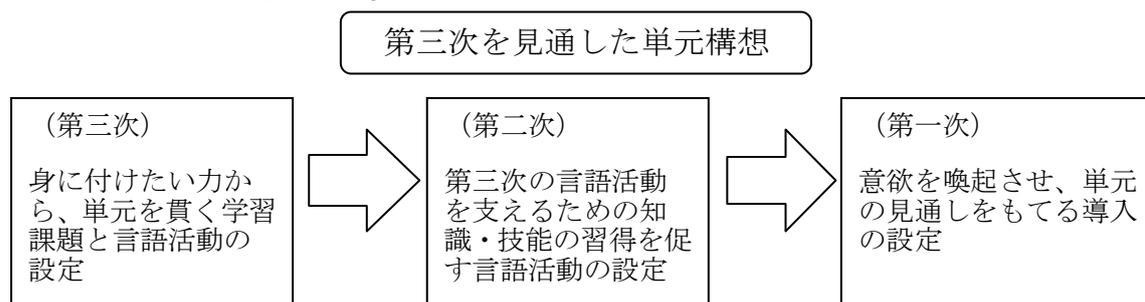
児童の実態把握を進めるうちに、基礎的な内容において学力の個人差が大きく、読み取る力や聞き取る力、そして表現力が十分に育っていないということがはっきりしてきた。

そこで、昨年度は「表現力」に絞って研修を行った。その結果、積極的に伝えようとする態度や分かりやすく伝える能力は、学習意欲を喚起させる単元設定により向上する事や、読み取る力を高めるためには、児童の語彙力を向上させることが必要な事等が分かってきた。また、書かれていることから必要な情報を取り出し、条件に合わせて表現する力もこれからの課題であることを、全学年で共通理解できた。

(2) 校内での研修主題の設定

昨年度の研修の成果と課題を踏まえ、さらに効果的に「表現力」を高めていくために、研究課題を「自分の思いを豊かに表現できる子どもの育成」とした。そして、児童が「こんな自分になりたいから、この学習でこれを学ぶ」「この学習では最後にこのように表現したい」というエンド・ポイント（到達点）を自覚できれば、学ぶ「必要性」「有用性」に気付き、表現力の向上につながるという仮説を立て児童の実態に即した単元構想の研修を行うことにした。

その中では、特に、第三次（エンド・ポイント）を見通した単元を貫く学習課題と言語活動の選定がとても重要となる。そこで、校内での研修主題を『確かな学力を身に付け、自ら学ぶ子の育成～単元を貫く言語活動を位置付けた授業の工夫～』と決め、国語科を中心に研究を進めることにした。



(3) 研究内容について

児童の意欲を喚起させ、さらに持続できる「学習課題」は、学習の流れを分断させないためにも単元全体を貫くものを設定する。そして、付けたい力を見極め、言語活動の中からその課題解明に一番適した活動を設定していく。つまり、授業に単元を貫く言語活動を位置付け、学習課題解明を図ることで、確かな学力を身に付け、自ら学ぶ子を育成していくと考え授業研究に取り組んだ。

○マトリックス型年間指導計画の作成

同じ指導事項をどこで指導し、どの程度身に付けさせたか、どのように指導する予定かをはっきりとさせるために、マトリックス型年間指導計画を全学年で作成した。付けたい力を見極め、計画的に指導するためにこの指導計画を確認しながら言語活動を選定していった。

○授業実践研究

1学期には、「いろいろな動物の身の守り方クイズをしよう」を学習課題に据えた1年生の説明文の公開授業を行った。そこでは、児童に付けたい力を「文章表現上の順序を考えながら内容の大体を読み取り、それらを活用すること」ととらえ、そのための言語活動として「クイズ作り」を設定することで、児童が本文の書きぶりを学んだり、動物の図鑑を並行読書したりする必要性と意欲の継続を図った。

この授業を通して、単元構想において、4つの要素、つまり、①魅力ある目的・目標の設定、②児童の欲求・欲望の活用、③児童の実態把握、④児童に、付けさせたい力の明確化が重要であることを確認した。

そこで、これを2学期の学習指導案では指導計画に取り入れることにした。

2学期の前半には、「人物の気持ちを考えて読もう」の単元で「サーカスのライオン」という3年生の物語文を扱い、教材文への児童の関心を大切にするため、児童の感想からの疑問を解明することを基にして、学習計画を立てた。

児童の「一場面の火の輪は3本なのに、なぜ最後は5本なのか」「じんごはいないのにお客さんは、どうして手をたたいたのか」等の初発の感想から、曲芸の前にサーカスのおじさんがお客に「じんご」のことを説明しただろうと想定し、お客に語ったと思われることを「サーカスのおじさんの語り原稿」として書き、書かれていない物語の場面をつくりだすことを単元を貫く言語活動として、児童に意識付けた。そして、その語り原稿が書けるようにするために、第二次で毎時間「じんごのおじさんへのつぶやき」を書かせ、「じんごの行動や心情の変化をとらえること」を付けたい力に位置付けた。

この授業で、

- ① 単元を貫く言語活動は、毎時間のつながりがあって成立するので、単元を貫く学習課題の設定が重要。
- ② 課題設定については、物語文の場合、初発の感想とつなげることで児童の学習意欲が高まる。また、児童が興味をもち続けられるような第二次の活動の工夫が大切。
- ③ 教材文には押さえない言葉がたくさんあるが、言語活動の時間を確保するために、焦点を絞り、網羅的に扱わないこと。思考の整理のためのシンプルな板書も心がける。等、改めて授業改善への具体的なイメージをつかむことができた。

これまでの実践の気付きを生かして2学期の後半には、5年「『注文の多い料理店』のなぞ解きをしよう」の授業を行った。ここでは、付けたい力を「登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること」とし、児童の感想から各場面のなぞを取り出し、毎時間の学習課題として解いていき、単元の終わりに「なぞ解きブック」を作ることを、単元を貫く言語活動とした。

本実践を通して、目的をもって読ませることが児童の学ぶ意欲につながることを再認識し

た。また、教材で読み取った文章構成を使って謎解きの解説を書き進めることで活用する力を身に付けることができた。

2. 調査研究の成果の把握・検証

本研究の成果の把握・検証については、ノートやワークシート等の表現物と「やまぐち学習支援プログラム」による定量的な数値の比較を中心に行った。

○学習後のノートやワークシートより



紙のほろほろの紙くずのようになつた顔がなせなあらなかつたのかねんごなのかしりたりです。

初発の感想

初めの感想 思ったこと、心に残ったこと、疑問 など

注文の多い料理店は料理店の方か
が注文をまじげた客を食べる
からず、ごくおそろしい料理店た
なと思ひました。

ふふことニワトリしあ何かがしゅべ
たのがすこかた。

・なんで門にかいてあつて白くまの
ぶうな犬が死んだのにP20にとをつき
破つて部屋の中にとびこんでP21で犬が
フーとなつてもどてきましたと書き
あるのがきばります。け、よく料理店
はたがの空もつた、たのかね。

紙のほろほろの紙くずのようになつた顔
がなせなあらなかつたのかねんごなの
かしりたりです。

解説員

解いたなぞ

なぜ紙くずのようになつて元にもどらぬのか。
まずしんしは、あんなりにいじめたため顔がくしくし
になりまして、(P20)でもなせ、東京に帰つても
お湯に入つても元のにおりににもどらぬ。たのどしき、
それは、しんしの性格が悪いから、お湯に入つても
お湯にこたわつています。だから一番めつたつて顔に物をの
こしたという、覚けんがでました。

紙くずにした意味は、紙くずは、紙くずは、紙くず、
くしくし、にしたらなおりますか？なおりますん。
このような苦味があつて紙くずにしたのでしよう。
〔注文の多い料理店〕 宮沢賢治

この児童は、毎時間の友達との話合いによるなぞ解きを通して自分の考えを深め、紳士の顔が紙くずのようにくしゃくしゃになつてもとにもどらなくなった意味について、「この作品では、紳士の性格が悪いから、紳士の変化を、くしゃくしゃにしたらなならない『紙くず』という言葉で表している」と解釈し、使われた比喻表現の意味に気付くことができた。

このような児童一人ひとりの表現物の変化から読みの深まりを確認できた。

○やまぐち学習支援プログラムより

本校では、山口県独自の学力向上システムである「やまぐち学習支援プログラム」を日常的に活用しているため、そこにある学期末問題で成果の把握・検証を図ることにした。

検証方法としては、1学期末と2学期末に実施した学期末評価問題を、「書くこと」「読むこと」の観点ポイントで比較した。変化が大きかったものをあげると、3年生では、「読むこと」が21ポイントアップした。また、4年生では、「書くこと」が14ポイント、「読むこと」が6ポイントアップし全体的な学力向上が結果として表れている。高学年については今のところ点数では大きな変化はないが、作文での表現力の向上や読み取りの学習での話合いの質の高まりを実感している。

以上のように、重点課題である「児童が表現したくなるような単元を貫く言語活動の充実」及び「児童の思考を促す発問、板書、ノート指導の工夫」等の取組を通して、児童の主体的な学びが育成され、意欲的に学習に取り組む姿が見られるようになった。その結果、基礎的・基本的な知識や技能が向上し、読み取る力や聞き取る力、そして表現力が育成されてきている。これを継続する事により学力向上をさらに推進していきたいと考えている。

3. 今後の課題

今年度は、研究主題を『確かな学力を身に付け、自ら学ぶ子の育成』として、単元を貫く言語活動の設定という視点で授業研究を進めてきた。エンド・ポイントを提示することで、児童が学習の見通しをもつことが意欲の継続につながり、効果をあげてきた。また指導計画を見直し、重点指導事項と指導内容の精選を図ることができた。

しかし、単元によっては、効果的な言語活動を選定するのが難しい場合がある。そこで、今後の課題として、どのような教材でも単元を貫く言語活動ができるよう、教材の特性に応じた言語活動のタイプを整理していくように研究を進めていく予定である。さらに、「個、グループ、全体」の学習形態を授業の中で効果的に位置付け、一人ひとりに分かる授業を実現し、自ら学ぶ児童の育成を図っていきたい。